

令和7年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和7年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、2～4学年が目標を上回っているが、5・6年生が目標を下回る結果となった。中学年は「漢字を書くこと」にやや課題が、高学年は思考力・判断力・表現力を問う問題に課題が見られた。説明文の内容を読み取ったり、調べたことをもとに文章を書いたりする活動を日常的に取り入れることや、学習した漢字を普段から活用していく習慣を付けること等、低学年のうちから取り組ませていく。
社会	学校全体（5、6年）の社会の正答率は、全ての学年が目標値を下回っている。知識の定着に課題が見られるため、学習後に復習を十分に行い、知識・技能の定着を図っていく。その上で、資料を読み取り活用する力もつけさせたい。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、1～5学年が目標値を少し上回ったが、6学年は下回った。既習事項の確実な定着を図り、基礎・基本の力を培っていくと共に、基礎・基本を活用して考える問題にも積極的に取り組ませていく。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が目標値と同等か、もしくはそれを下回っている。各学年において、基礎・基本の定着を図りつつ、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。
外国語	外国語の正答率は、目標値よりわずかだが下回っている。「アルファベットの書き」に苦手意識をもつ児童が増えている傾向にあるため、英語を書く活動を意識的に取り入れ、慣れ親しめるよう授業の改善を行っていく。

本校の教育目標
◎よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・生きて働く「知識及び技能」の習得 ・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成 ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・国語科における、言語活動（話す・聞く）を充実させるための工夫を通し、児童の主体性を育むことを目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観・ブロック会での事後検討を通して ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（5年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	本校の平均正答率は、区の平均正答率を下回る結果となっている。学年の内容別正答率を見ると、「調べたことをもとに文章を書く」が顕著な課題となった。「文章を書く」ことは、区の平均上回っているため、必要な情報を取捨選択し、活用していく力を着けることが必要である。	まずは、様々な情報を継続して読む時間を充実させる。特に、資料や新聞を比較して読むことや、図書室で自身の目的に沿った本を探す活動は定期的に取り入れる。また、国語科だけでなく、教科横断的に資料を比較し、読み取る力をつけていく。次に、情報を取り扱う技法を指導する。そして、収集した多様な情報を共有したり、まとめたリする段階では、課題解決につながる文章を抜粋し、必要な情報を精査し、自分の考えや表現に役立てる練習を行っていく。	国語の授業だけでなく、社会や総合的な学習の時間等の他教科においても、情報の比較・収集・活用をしていき、自分の考えをまとめる学習で積極的に取り入れていく。また、情報を取り扱う技法については、様々な思考ツールの活用を経験させ、適切に情報が整理できるよう指導を充実させる。また、成果物をポートフォリオにし、学習の足あとを残すことで、児童の自信に繋げる。
社会	全体の平均正答率は、区の平均正答率を若干下回る結果となっている。学年の内容別正答率を見ても、5つのうち3つの項目で平均点を下回っている。単元の大まかな内容は理解できているが、社会的事象について考え、理解できていないことや、一部の児童で資料の読み取り方を理解していないことが原因と考えられる。	社会科見学の实地での学習体験や、動画教材を効果的に活用するためにも、事前に児童に課題意識をもたせるような授業展開を工夫する。また、資料の読み方や活用の仕方を丁寧に指導する。社会的事象を児童が意識できるよう教室掲示を工夫し、既習の言葉を使って考えを交流させたり、ノートにまとめさせたりする学習を積極的に取り入れる。	学習課題に沿って、児童が調べる活動を継続的に行っていく。資料は、教科書だけでなく、資料集や動画教材等、児童自身に選択させ、どの資料からどんなことがわかったのか、根拠をもって説明できるよう児童同士で交流させたり、全体で発表させたりする。
算数	全体の平均正答率は、区の平均正答率71.9％に対して0.2ポイント下回る結果となった。基礎は0.2ポイント上回り、活用は1.5ポイント下回った。平均正答率と区の平均正答率はほぼ同等であるものの、図形など空間認識に関わる単元で正答率が低い結果となった。特に「角の大きさ」は、6.0ポイント下回り、指導の工夫が必要であると考えられる。	空間認識を伴う単元で課題が見られたため、具体物を使った操作活動を多く取り入れ、体感的に理解させる。また、ICTを活用して図形を回転、拡大、縮小して動かすことで、さまざまな角度からの見え方を視覚的に学ぶ。さらに、日常生活に関連づけた問題や対話的な活動を取り入れ、思考を言語化する場面を増やすことで、基礎の定着と活用力の向上を図る。	図形や角の大きさなど苦手な児童が多い単元を中心に、実際に手を動かす活動で理解を深める。発展指導ではグラフや表など得意な児童が多い単元を中心に少し難しい問題や生活に関わる場面を考えさせ、考える力や説明する力を伸ばす。児童の理解の様子に応じた少人数での指導や、ICTなども活用し、基礎と応用の両面から力を伸ばせるようにしていく。
理科	全体の平均正答率は、区の平均正答率を5ポイント下回る結果となった。問題の内容別正答率を見ると、12項目のうち10項目で区の平均正答率を下回った。特に「1年間の植物の成長」は18.8ポイント、「天気のようにすと気温」は15.2ポイントと大幅に下回り、課題となった。児童が主体的に実験、観察を行う場面を多く取り入れながら、学習に取り組ませていく。	「1年間の植物の成長」「天気のようにすと気温」については、定期的な実験・観察を行う。写真やグラフを活用して変化を視覚化し、全体の変化を捉える工夫をする。実験・観察だけで終わらず、「なぜ植物は伸びたのか」「この時期に花が咲くのはなぜか」などの問いを立て、児童が自ら記録をもとに考察する場を設定する。また、年間を通した学習の見通しをもたせ、振り返りの機会を設ける。	観察や実験の様子を動画で振り返らせたり、デジタル教材を使って手順を視覚的に理解させる。記録は、ICTを活用し、写真や音声で記録できるようにする。また、実験結果を表やグラフにして共有し、友達の考えと比較させる。ICTを通じて、理解の補助だけでなく、思考の深まりや表現力の育成を図る。